



さい帯血バンクNow

第13号

<http://www.j-cord.gr.jp/>



年次報告と 記念シンポ

患者さんら200人

日本さい帯血バンクネットワークは、7月27日に東京・大手町のサンケイプラザホールで「日本さい帯血バンクネットワーク年次報告会2003」を開催しました。この年次報告会は、今年6月にわが国におけるさい帯血バンクを介した非血縁者間さい帯血移植が、累計で1000例を突破したことを記念した公開シンポジウムを兼ねるものになりました。

まず、主催者代表として日本さい帯血バンクネットワークの齋藤英彦会長の挨拶の後、厚生労働省をはじめとして来賓の挨拶を頂戴した後、基調報告として「さい帯血移植1000例の歩み」そして「さい帯血移植の

移植成績」さらに「さい帯血バンクの現場から、各地の取り組み」がありました。そして、全国11のさい帯血バンク代表者が同じ席について「パネルディスカッション——さい帯血バンクあんなことこんなこと」=

写真=で活発な論議が行われました。この催しには、全国のさい帯血バンク関係者をはじめ、さい帯血移植を体験した患者さんやボランティアの皆さんなど200名あまりが参加しました。 = 2~3面に関連記事

厚生労働大臣に2要望書

日本さい帯血バンクネットワークは、公的さい帯血バンク事業の安定的な運営のため、2つの要望書を厚生労働大臣にあてて提出しました。

ひとつは来年度政府予算編成を前に、さい帯血バンク事業に関する来年度の国庫補助金を要望したもので、

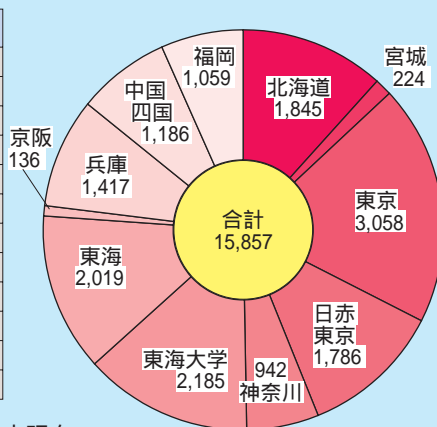
6月27日に提出しました。内容は「来年度は5000程度のさい帯血を保存したいこと」「保存細胞数基準引き上げのコストアップ」「さい帯血の運営経費負担」「設備備品類の改善」「5周年記念事業を含む普及啓発費増額」「国際協力推進のための新規経費」などを要望しました。

もうひとつは8月18日に提出したもので、さい帯血に医療保険の適用を求めた要望書です。これは、今後のさい帯血バンク事業は国庫補助金だけではなく、移植に用いたさい帯血そのものに保険点数をつけて、きちんと保険医療会計のなかに位置づけてほしいとするもので、移植に使ったさい帯血一つにつき、213,000点(213万円)を要望しました。この点数の算出には、来年度以降の5年間に行われるであろうさい帯血移植件数を推計し、その間にさい帯血バンクが必要となる経費総額を積み上げ、1件あたりの費用を計算したものの。

各バンクの移植(供給)数

バンク名	~02年度	03年度	合計
北海道	168(171)	36(43)	204(214)
宮城	1(1)	1(1)	2(2)
東京	161(165)	37(40)	198(205)
日赤東京	62(66)	47(50)	109(116)
神奈川	66(68)	9(9)	75(77)
東海大学	114(127)	44(51)	158(178)
東海	140(142)	26(26)	166(168)
京阪	-(-)	0(0)	0(0)
兵庫	135(144)	39(38)	174(182)
中国四国	24(25)	7(6)	31(31)
福岡	25(28)	4(4)	29(32)
合計	896(937)	250(268)	1146(1205)

保存さい帯血の公開数



【注】 表とグラフのデータは、2003年8月末現在。
表の数字はカッコ外が移植数、カッコ内が供給数。
移植数は使用数であり、複数さい帯血同時移植(2本のさい帯血を同時に移植)が4例行われているため、累計実移植実施数は1142例。複数さい帯血同時移植は、02年度3月に1例、03年度4月、5月、7月に1例ずつ実施。

HLA 適合より細胞数

年次報告と 記念シンポ

次に「さい帯血バンクの現場から」と題して、高梨美乃子事業運営委員から日本さい帯血バンクネットワークを構成する全国11のさい帯血バンクの取り組みが報告されました。

他のバンクに学ぶ

現場の取り組み報告



11のさい帯血バンクはそれぞれ運営母体や発足の経緯も違って、同じさい帯

血バンクとはいえ、かなり活動内容も異なる部分があります。

また、それぞれが地域性を持ってユニークな活動を展開しています。そんな各地の個性的な取り組みを知り、自分たちのバンクの運営のために大いに参考になった、と感想を漏らすさい帯血バンク関係者も多くいました。



日本さい帯血バンクネットワークの年次報告会を兼ねた「非血縁者間さい帯血移植1000例突破記念公開シンポジウム」は、第1部の式典に引き続いて、第2部として3つの基調報告とパネルディスカッションがありました。

最高齢者は76歳

1000例までのあゆみ

まず最初の基調報告として「1000例までのあゆみ」が野村正満事業運営委員長からありました。



さい帯血移植の歴史にふれた後、今年の1月から6月までに行われた220例の

さい帯血移植から得た最も新しいデータの提示もありました。それによると、移植患者を年齢別にみると、15歳までの小児領域は24%で、さい帯血バンクの初期段階ではほとんどが小児患者が対象であったのですが、今では成人患者にも広くさい帯血移植が行われていることが明らかにされました。また、50歳以上の高齢者への移植は35%もあって、最高齢は76歳の患者さんもありました。

さらに、最新の220例の HLA 一致度では6座一致が12%、5座一致が39%、4座一致が49%で、HLAでのミスマッチを避けることよりも、より細胞数の多いさい帯血が選択されていることもわかりました。

非腫瘍性にも有効

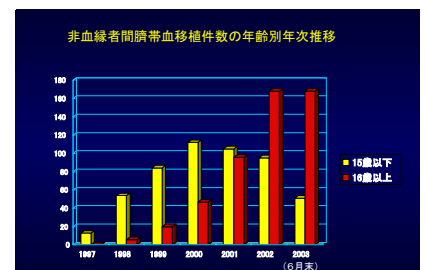
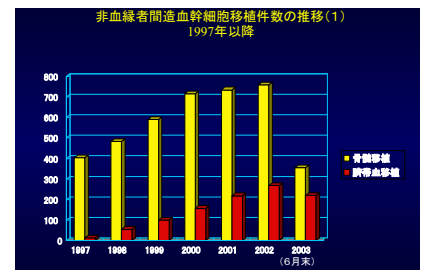
さい帯血移植の成績

続いて、加藤剛二事業運営委員より「さい帯血移植成績報告」がありました。疾患別、病期別、年齢別など細かい移植成績の分析が発表されましたが、東大医科研グループの成人患者（標準危険群）への100%生存率というすばらしい成績も披露されました = 関係グラフは右に =。

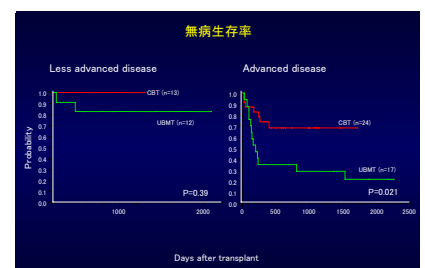


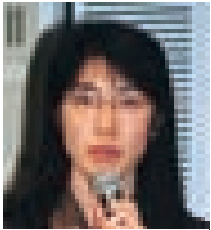
また、これまで非腫瘍性疾患（特に再生不良性貧血）では、生着不全が発生

しやすく、さい帯血移植の成績は良くないとされてきましたが、虎の門病院グループが取り組んでいるさい帯血を用いたミニ移植の成績も報告されて、今後の非腫瘍性疾患へのさい帯血移植の有効性を示唆するものもありました。



東大医科研グループの成績





北海道・茂木祐子



宮城・四方田淳



東京・山口暁



日赤東京・小川篤子



神奈川・磯山恵一



東海大・加藤俊一



東海・矢崎信



京阪・松本加代子



兵庫・下野珠実



中四国・山村一



福岡・佐藤博行



司会・木幡美子

さい帯血バンク あんなこと、こんなこと

さらに、パネルディスカッション「さい帯血バンクあんなこと、こんなこと」が、11のさい帯血バンクから1名ずつ、様々な立場のスタッフが壇上に上がって並びました。採取病院、分離調製、広報領域など、それぞれが自分の立場から現在直面している問題などを話し合いました。

= 顔写真の敬称略

ところで、さい帯血バンクのスタッフは、さい帯血移植を受ける患者さんとはほとんど接点がありません。自分たちが移植病院に送り出しているさい帯血を移植している患者さんはどのような方なのか、まったく顔が見えていないのです。

そこで、昨年さい帯血移植をして元気になった患者さん一家が登場しました。愛知県でいちご農家を経営する加藤徳男さんです。加藤さんは



④西親と一緒に深くとお礼するあいかちゃん(円内モ)
⑤加藤さん夫妻に質問する木幡アナ

骨髄バンクのドナー登録会推進のため、奥さまの真紀さんと幼い娘のあいかちゃんとともに、ご一家でポスターに登場するなど骨髄バンクに協力してきました。

しかし骨髄バンクでドナーは得られず、昨年さい帯血移植を受けました。そして順調に回復してこの日、元気な姿を見せてくれました。あいかちゃんもマイクを持って「ありが

とうございました」とあいさつしてくれて、会場は大いに盛り上がりました。また、加藤さんからの提言やパネルディスカッションで話し合われたことは今後のさい帯血バンク運営に反映されることとなります。

なお、シンポジウムの進行役は自らもさい帯血を提供したフジテレビの木幡美子アナウンサーが見事な司会ぶりを見せてくれました。



すこやかに、幸せに。

明日への夢、描きたい。

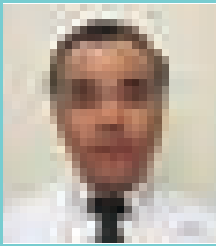
人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療機器を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。



ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号

あんな委員会 こんな部会② 適応判定委員会



委員長・加藤俊一

さい帯血移植の適応は、原則として骨髓移植や末梢血幹細胞移植と同様です。各さい帯血バンクにはそれ

ぞれの適応判定委員会が存在し、日常的に作業を行っています。しかし、時には個々のさい帯血バンクでは判定に迷うような事態も発生します。そのような場合に、ネットワーク全体で適応について審査するようにしようということで、平成14年に事業運営委員会の小委員会として「適応判定委員会」が発足いたしました。

委員は判定内容の性格上医師のみで構成（委員長：加藤俊一、副委員長：西平浩一、委員：幸道秀樹、土肥博雄、原宏、矢崎信）さ

れています。

この委員会では以下のような問題について審議・審査しています。

1. 疾患や症例としての適応

従来の造血幹細胞移植の適応とは認められていないような病気に対する移植の申請があって、当該のさい帯血バンクでは判定が困難である場合にはこの委員会で審査をすることになっています。また、新しい移植方法などで日本さい帯血バンクネットワークが試験的研究として認めた場合にもこの委員会で審査をすることになりました。

2. 登録病院以外からの申請

他の造血幹細胞移植後の生着不全や、全身状態不良などで転院ができないような場合における非登録病院からの申請については、各バンクの判断で可否を決定し、速やかに事業運営委員会に報告することが義務づけられています。

その他の状況における申請については、この適応判定委員会に判定を依頼することになっています。

3. 登録病院の規準の見直し

医療技術の進歩、特にさい帯血移植の普及に伴い、非血縁者間さい帯血移植を実施できる登録病院のあり方について定期的に見直しをしていく必要がありますが、平成15年度より登録病院の規準の見直しについてもこの委員会で審議をして、事業運営委員会に答申することになりました。

これまでにこの委員会で審査をした件数は平成15年8月末現在で17件です。年度別にみますと平成14年度9件、15年度8件で、判定内容別にみますと、疾患としての適応判定が1件、複数さい帯血移植の適応判定が6件、非登録病院からの移植申請が10件となっています。審査結果は、「可」とされたものが12件、「条件付き可」とされたものが3件、「不可」とされたものが1件、「保留」となったものが1件——となっています。

移植施設の登録基準を緩和

さい帯血バンクを介したさい帯血移植を行うには、日本さい帯血バンクネットワークに登録した病院（診療科）でなくてはなりません。このほど、日本さい帯血バンクネットワークでは、移植施設の登録基準を定めた「技術指針」の一部を改訂しました。

これにより、移植施設の登録基準は、緩和する形で変更になりました。主な改訂点は移植件数です。改訂内容は以下の通りです。

同種造血幹細胞移植を過去5年間で内科10例以上、小児科7例以上実施していること。

この改訂により、さい帯血移植に取り組む登録病院がさらに増えることが予測されます。登録は診療科ごとが原則になっていますが、複数診療科（チーム）で登録を希望する場

合は、別途申請が必要となります。

保存さい帯血は来年度3300個

本号では、日本さい帯血バンクネットワークが予算関連の要望書を厚生労働大臣にあてて提出した記事を第1面に掲載しましたが、編集最終締め切り直前になって、来年度予算の厚生労働省臓器移植対策室関連の概算要求額が明らかになりました。

さい帯血移植対策事業費としての補助金は来年度要求額が6億2846万円で、今年度予算額の6億1750万円から2%弱の微増となっています。中身についての詳細はまだ明らかになっていませんが、保存さい帯血の数が、今年度の3000個から3300個へと1割程度とわずかながら増えることになりました。また、今年度は日本さい帯血バンクネットワーク体制

なお、このほかにも登録にはいくつかの条件を満たすことが必要です。新たに登録を希望する移植施設は事務局にお問い合わせください。

再構築事業費として6000万円が計上されていますが、その額はほぼ通常予算として経年化されることとなります。

詳しい内容はこれから役所の説明を待たなければなりませんが、残念ながら私たちが要望したものが実現することは、これで無理かもしれません＝1面参照。

一方、骨髓移植対策事業費（骨髓移植推進財団への補助金）の概算要求額は4億6208万円（今年度予算4億3939万円）で、いくつかの新規メニューも盛り込まれています。

この概算要求に基づき、財務省の原案が作られ、政府予算案となって国会審議に付されます。